異世界の戦い

ながれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の戦い

【Ｎコード】
Ｎ４３６２Ｚ

【作者名】
ながれ

【あらすじ】
「勇者、オレと賭けをしないか？」魔王は勇者と賭けをした。千年後、魔王は再び異世界人とともに再来する

第一話　プロローグ

「…はぁ、…はぁ……」

雨の降り頻る森のなかを一人の女性が息を切らしながら進んでいる。歳は二十にさしかかる頃だろう、まだ少女のような容姿がのこっており街中を行けば十人がみれば十人がふりかえる美人だった。

しかし、肩から血を流し矢が生えた左足をかばいながら行くその痛々しい姿が全てを台無しにしていた。

「――私はどうなったって良い。…でも、この子だけは……」

彼女の名はシルファ・ファーク。

この世界アルスギニアを侵略し征服しようとした魔王を倒した勇者である。

そんな彼女が、なぜ死にかけているのかと言うとその絶大なる勇者の「力」を供給する教会から授けられた聖剣ベサルタが手元になくシルファ本人はそこまでの力を持っていないからだ。

だとしてもシルファは常人の数百倍の魔力をもっているがそんなモノで魔王は倒せない。シルファが魔王を倒せたのは単に聖剣ベサルタとの相性と偶然の重なりだけだったのだ。

そしてシルファは魔王討伐の旅の凱旋の折に教会にベサルタを返しその祝いのパーティーに出席し、毒入りの酒を――――飲んでしまっ

たのだ。

「なんで、…私は殺され、るんだ……」

「簡単だ。各国の王と教会が民衆の羨望のあつまる貴様を恐れたからだ」

シルファは自問した。そのはずなのに返す声がある。

（…どこ、かで聞いた…、声……）

シルファは周りを見渡すと先の大木に背をつけて腕を組む青年がいた。

「おま、えは魔王…！」

そう、どこにでもいそうな黒髪黒眼の容姿で見たことも無い服に身を包むあの青年は自らが倒したはずの魔王だった。

「驚いているな、あんな鈍い一太刀で幾多の世界を渡り歩いたオレを殺せたと信じ込むとは呆れたものだ」

魔王は不敵に嗤う。

「そんな、まさ、か…」

シルファは脱力し崩れ落ちた。身体に盛大に泥水がかかった。

（……私と、仲間達の…努力は無駄だったの、か……）

シルファの脳裏にともに戦った仲間達と途中で出会った人々の顔が浮かんでは消えていく。

「成る程、マンティコアの猛毒にマンドラゴラの薬効成分を足すことで半端(はんぱ)に苦しめて殺す毒か。教会もえげつのない真似をする」

いつの間にか近付いた魔王がシルファを見下ろし、感心したように頷く。

「ん?、勇者よ。貴様身篭っているのか」

そうなのだ。

シルファは共に旅をした騎士と恋におち、神から子を授かったのだ。

その騎士も森に逃げる途中で囮となって離れてしまった。

魔王はしばし考え込み口を開いた。

「勇者、オレと賭けをしないか?オレはもうこの世界に用は無い。欲しい物は手に入れたからな」

魔王は手には一本の剣を持っていた。

シルファが教会に返したはずの聖剣ベサルタだった。

「――そこでだ。オレは千年後、また一度この世界アルスギニアに来訪する。それまで貴様の血統が絶えていないのならオレがアルスギニアに平和をもたらそう。そのための前提として貴様と貴様の子を助けてやる」

悪い条件ではない。

でも、相手はあの魔王だ。信じられる訳がない。

「こっちだ！　勇者がいたぞ！！」

追っ手が来てしまったようだ。結婚を誓った彼はどうなってしまったんだろう。

「見つかったぞ。推測するに教会の異端討伐部隊だな。捕まればまず無い」

自分はどうなっても良い。でもどうしてもこの子だけは助けたい、それこそ悪魔と契約してでも。

「分か、った……」

それを聞いた魔王は口の両端を吊り上げた。

「了承した。跳ぶぞ≪失踪する影（ダークスピーダー）≫」

聞いた事のない魔法と共にシルファの意識が消失した。

――――――――――――――――――――
――――――――

「ん…、朝？」

閉じた目蓋の裏側に光が差し込みシルファは目を覚ました。

（やっぱりあんなの悪い夢だったんだ。魔王が生きているなんてなんて悪夢だったんだろう）

シルファは上半身を起こしてベッドに座った。

「お目覚めのようだな、勇者」

「な、何者！？」

シルファはとっさに聖剣ベサルタを探すが何処にも無く、よくよく見れば寝ていた部屋も見慣れないものだった。

「貴様が気絶したものだから、魔王城に運び治癒呪文をかけ介抱してやったのだ。感謝しろ」

そうか、あの後私は気絶したんだ。それに言われてみれば身体の痛みも嘘のように消えている。

魔王に素直に感謝しようと顔をむけた時、ふと視界に魔王の持つ手鏡が映った。しかし手鏡に写る顔はシルファのそれではなかった。

手鏡をひったくりもう一度よくみるがやっぱり、それはシルファの顔ではなかった。

「それは【虚構の自分（ライアーリスト）】、映った顔の形から髪の色まで自在に変える手鏡だ」

今の、シルファの顔は銀髪銀眼の幻想めいた美人な女性だった。

「な、なぜこんな事を…？」

「前の顔のままでは勇者だとバレて面倒になるからな。そのためだ」

魔王は一拍あけて、また喋った。

「そして、最後に貴様の記憶を消す」

物凄い勢いで魔王はシルファの頭を掴み呪文を唱えた。

それが〝シルファ・ファーク〟の見た最後の景色である。

とある村の入り口に一人の銀髪銀眼の女性が木によりかかるように眠っている。

それを一人の青年が数秒見つめた後、村の反対に向かって歩き出した。

「あの容姿では迫害の的だ。だが、彼女の血は魔力が高い。うまく使えば成り上がる事もできるだろう」

青年は嗤う。

「千年後が楽しみだ」

青年が取り出したナイフで空を切るとそこから真っ黒な穴が出現し
青年はそこに消えていった。

千年後　アルスギニア　とある丘の上

空間が歪む。
その歪みは黒く染まっていき虚空に浮かぶ穴となりそこから数人の
人が現われた。

「来てやったぞ。勇者」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4362z/

異世界の戦い

2011年12月15日00時46分発行